

若年流動層の地域的受容—白馬村の宿泊業調査

羽 渕 一 代
井 戸 聡

はじめに

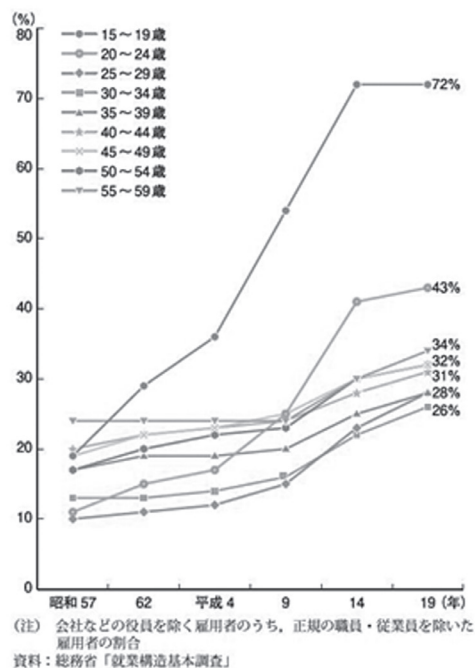
就業や労働に関わる若者研究が、主流となったのは2000年代に入ってからである。1970年代は、若者の政治的アパシーが問題となり、1980年代には、消費文化の興隆とともに消費者としての若者が照準された。1990年代に入り、コミュニケーションの問題がとりざたされ、その後に労働問題の主演として若者が浮上したという経緯がある。

これは、若者が社会状況を映す鏡として機能していることのあらわれである。真偽はともかくとして、若者の就労意識の低下や労働市場の構造的な問題などから説明される若者の労働問題であるが、若年層の就労意識か、就労構造の問題か、という点から考えるならば、若年層の労働社会学的研究において、構造の問題であるというものが通念として形成されている。

若者の非典型雇用率の変遷を確認しておきたい。よく目にするものであるが、総務省の「就職構造基本調査」によれば、15歳から19歳までの若年非典型雇用者率は急上昇といっても過言ではない

(図表1)。1982年以降、この最若年層は、急激に非典型雇用者率を高めている。若者の仕事・就職の悩みの上層率と平行とはいえないが、明らかに、お金の悩みとは連関していると仮定できる。非典型雇用者率の上昇は、仕事や就職の悩みではなく、生活をしていくことに関わる、つまり生存に関わるお金の悩みと相関しているのだ(図表2)。若年非典型雇用者の悩みのトップは、お金のことである(岩田、2008)。さらに家族のことで悩む、若年非典型雇用者も典型雇用者や学生と比較して有意に多い。

総務省のデータは、1970年以降のものであるが、そもそも1960年代までは、10代の多くの若者は年少者として位置づけられ、労働市場のなかでは、保護の対象であった(荻谷・菅山・石田編、2000)。彼らの多くも、やはり非熟練労働に従事していたといわれており、臨時工制度など二重構



図表1 年齢層別非典型雇用労働者率

造の下位部分を占めていたといわれている（加瀬、1997）。

つまり、よく指摘されるように、現在の若者の非典型雇用率は70年以前の状況と同じ程度になったと理解できる（岡本、2008）。しかし、1960年代後半からおこった、極端な労働力不足を背景とした新規学卒一括採用からそのまま終身雇用へと移行させるシステムを構築したことによって、現在の典型雇用が一般化したことを鑑みるならば、過去へ逆行といっても、個々人の若年労働者にとってみれば、就業制度や構造はまったく新しい経験となる。言いかえるならば、制度側の変更には若年労働者の労働意識が追いついていないとみることができる。

図表2 若者の悩みの変遷（岩田、2008より）

	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2007(杉並)
勉強や進学のこと	20.5	27.0	29.4	28.4	29.8	27.5	28.6	27.4
就職のこと	15.6	15.7	18.0	18.0	17.3	21.9	27.7	29.6
仕事のこと	27.6	16.8	15.3	15.3	15.6	14.6	19.4	46.7
家族のこと	20.0	8.4	9.7	9.7	8.8	8.3	8.7	25.7
友人や仲間のこと	18.2	13.5	12.2	12.2	13.3	9.4	11.4	19.7
異性のこと	18.7	15.4	12.0	12.0	14.0	11.0	10.7	30.7
お金のこと	18.5	13.3	15.3	15.3	16.6	19.4	23.2	48.3
政治や社会のこと	11.0	4.3	4.1	4.1	3.9	4.1	6.5	16.1
性格のこと	21.6	14.5	13.0	13.0	12.5	10.2	11.3	23.6
健康のこと	16.7	11.6	11.3	11.3	12.0	13.1	13.4	32.3
容姿のこと	5.9	4.9	4.4	4.4	7.6	6.2	7.6	25.9
悩みや心配ごとはない	10.4	22.8	26.5	26.5	28.8	34.2	27.9	5.7

総務庁、青少年の連帯感などに関する調査データより作成

若年労働者にとって、現代の就業構造は不測の事態として降りかかっているようである。一方で、これまでも若年層の非典型雇用がおこなわれてきた職種はある。その一例が宿泊業である。本稿の調査研究対象地である白馬村では、戦後、長い間、非熟練の若年労働者によって宿泊業が支えられてきた。本稿では、この地域における村外からの流入層である若年労働者に対して、どのような受け入れをおこなってきたのか、また、この地域独特の労働文化ともいえる慣行が若年層や地域にどのような影響を与えてきたのかということを考えてみたい。

1 白馬村の概要

ここで調査対象地とした白馬村の概要について説明を加えておこう。

白馬村は1998年の冬季オリンピックの開催地として知られているように、寒冷的な気候であり、豊かな自然を有するリゾート地となっている。急峻な山岳に囲まれた山村であり、村内に7つのスキー場が存在し¹、年間約250万人の人々が訪れる観光地である。

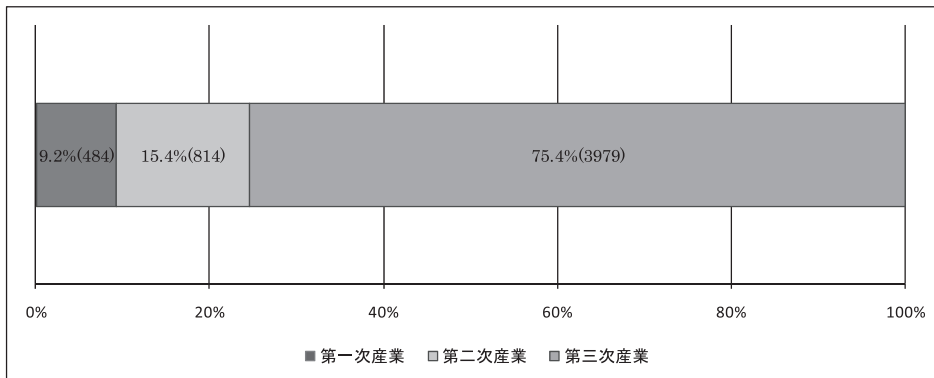
¹ 7つのスキー場とは、白馬ハイランド、白馬みねかた、白馬岩岳、八方尾根、Hakuba47、白馬五竜、白馬さのさかの各スキー場であるが、このうち白馬ハイランドスキー場は2009年春以降の営業を行っていない。

白馬村は長野県の北西部に位置し、面積は189.37km²で、東西約16km、南北約17kmの盆地である。西側は北アルプス白馬連峰を挟んで富山県と隣り合わせ、東は小川村と長野市鬼無里、北は小谷村、南は大町市と境を接している。白馬村の西側に位置する北アルプス一帯の急峻な山々と深い溪谷は美しい景観を構成し、登山、ハイキング、スキーなどのレジャーの資源となっている。

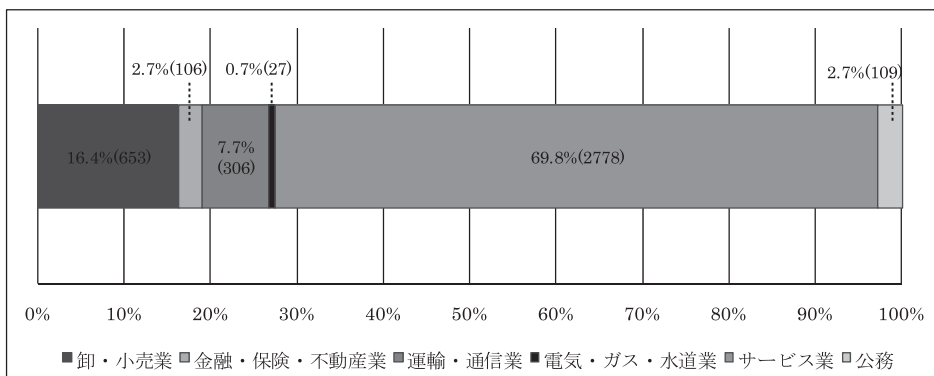
白馬村は1956（昭和31）年に旧神城村・北城村が合併して発足した。発足当初は集落数28、人口6,200、戸数1,540であったが、現在は行政区29、人口9,113人、世帯数3,631となっている（2010年5月1日現在）。産業の構成は図表3に示されるように、第一次産業9.2%、第二次産業15.4%、第三次産業75.4%となっており、第三次産業への就業人口が全産業のうちの4分の3を占める地域となっている。第三次産業の内訳では圧倒的にサービス業の占める割合が多く、観光業に関連するサービス産業が中心的な産業になっていることが分かる（図表4）。



図表3 白馬村の産業分類別就業人口



図表4 第三次産業就業人口の内訳



現在の白馬村は上記のように第三次産業、なかでもサービス業を主産業とする典型的な観光業地域を形成しているが、このような状況は戦後、特に高度経済成長期以降に顕著となってきた地域特性であり、以前は水稻、養蚕、麻を中心とする純農村であった。例えば白馬村が発足した1956（昭和31）年の産業別就業状況を見ると、第一次産業が63%を占め（第二次産業13%、第三次産業24%）、農家率は76%という状況であり、この時点ではまだ農村的性格が色濃かったことが窺える。

しかしながらこの地域は農業開発上の大きな問題を抱え続けてきた生産性の低い農村地域でもあった。冬季の長期にわたる積雪と寒冷な気候が農作の上での不利な条件であったことに加え、保水性に欠ける土地の特性の問題も存在した²。村の中央部をフォッサマグナが貫き、その断層に峰々から流れる松川・平川によって運び込まれた土砂によって、白馬盆地の中心部に複合扇状地が形成されているが、保水性に乏しいこの土地特性が農業開発の阻害要因となってきた。また山地を多く抱えながらもその多くが雑木と原野で占められており、経済的林業地域ではなかった（石井,1977）。以上のような条件的に不利な農林業の状況は、逆にこの村を観光化の道へと踏み出させた基礎的な社会経済的条件でもあったといえる。

白馬村の観光産業は明治期における白馬岳への登山者に対する山小屋経営に始まる。白馬岳登山は1894（明治27）年のイギリス人宣教師ウォルター・ウェストンを始めとする登山家や知識人・学術研究者の夏山登山によって開拓され始めた³。彼らの記した紀行文や学術論文の影響によって一般人による夏山登山者が急増するなか、1907（明治40）年に初の山小屋が松沢貞逸により白馬岳に設置されたが、これが白馬の観光産業の端緒であるとされている。

大正期になると便の良くなった交通網を利用して⁴、さらに多くの白馬岳登山者が訪れるようになった。また、明治末に日本に取り入れられたスキーが冬山登山と結びつき、山岳スキーとして普及するなかで、白馬にも大正初期にスキーが導入され、講習会を通じて学校や山案内人に広まっていった。昭和初期には村内三箇所スキー小屋が建てられたのを始めとして⁵、各所にスキー小屋が設置されるようになり、山岳スキーが盛んになっていった⁶。

白馬登山の際に必要な山案内人を地元の人々が担っていたが、この山案内人の家に登山者の宿泊に利用されるようになり、1937（昭和12）年に当局（警察）に許可を受けて細野地区（現在の八方地区）の16戸が民宿を営業するようになったが、これが民宿の発祥であるとされている（白馬村,1994）。民宿の叢生には次のような要因があった。ひとつは冬山登山と山岳スキーが普及し

² 戦前は稲作の生産性が極めて低く、米は購入しなければならないほどであった。

³ 1883（明治16）年の窪田畔夫（北安曇郡長）・渡辺敏（大町小学校長）、同31年の河野齡蔵（大町小学校長・植物学者）、同35年の山崎直方（地理学者）などが著名な白馬岳登山開拓者として知られている。

⁴ 1916（大正5）年に松本と大町を結ぶ電車が信濃鉄道株式会社により開通した。また、1919（大正8）年には大町・四ツ谷間に定期乗合自動車開通が同社によって開通した。また、1929（昭和4）年には大糸線が築場まで延長し、1930（昭和5）年に神城まで、1932（昭和7）年には信濃四ツ谷駅を経て信濃森上まで延長し、登山者やスキー客は鉄道で白馬へと訪れるようになった。

⁵ 1928（昭和3）年、細野咲花スキー場に村営宿泊所、翌年に猿倉村営スキー小屋、さらにその翌年に落倉村営スキー小屋が設置された。

⁶ 1932（昭和7）年には中部日本スキー選手権を招致するなど、スキー場開発やスキー大会の開催が盛んに行われるようになった。

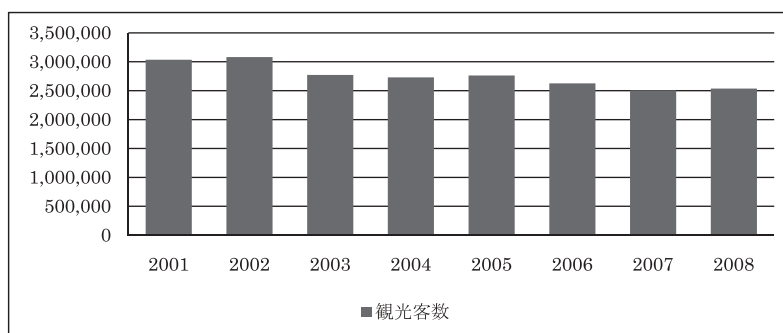
たことであり、もうひとつは冬山登山とスキーヤーは比較的長期滞在することが一般的であったこと、さらに昭和恐慌による農家の窮乏という経済的状況、これらが民宿の出現を促す要因であった（前掲,1977）。

第二次世界大戦中にスキー場開発やスキー大会の招致などの動きは衰えたが、戦後のスキーブームによってスキー人口は増加し、1950年前後から白馬における観光開発が本格化する。国体県予選大会や全国的なスキー競技の大会が開かれ⁷、また、機械動力による木製リフトが架設されたのを始めとして⁸、1958（昭和33）年には外部開発資本の東急資本によって八方尾根に空中ケーブルが導入されるなどの積極的な観光開発化が進んだ。観光立村を掲げて白馬村観光連盟が発足（1958年）し、全村的に観光開発が進められ、上記のスキー場開発に続いて、村内のその他のスキー場が新設・拡充されていった⁹。

入込客は増加し¹⁰、細野地区において16戸で始まった民宿は全村で営業されるようになり、1960（昭和35）年には総数295（収容人員13,440人）となっていた。昭和30年代後半には民宿・旅館の建築ブームとなり、かやぶきの家屋を建て直して新築したり大型化したりする民宿や旅館が増加した。また、昭和50年代からそれまでは雑木林や植林地、採草地などであった和田野やみそら野、エコランドなどの土地が開発されたり分譲されたりするなかで、ペンションを建てる人々が都市から流入してペンションブームとなった。1990（平成2）年の段階で宿泊施設数は合計829（旅館197、民宿210、ペンション303、ロッヂヒュッテ57、ホテル47、貸別荘15）、収容人員34,112人となっていた。

2000年以降の観光客の推移をみると漸減傾向にある（図表5）。特にスキー場への入込客数において減少傾向が明瞭となっている（図表6）。

図表5 白馬村の観光客数



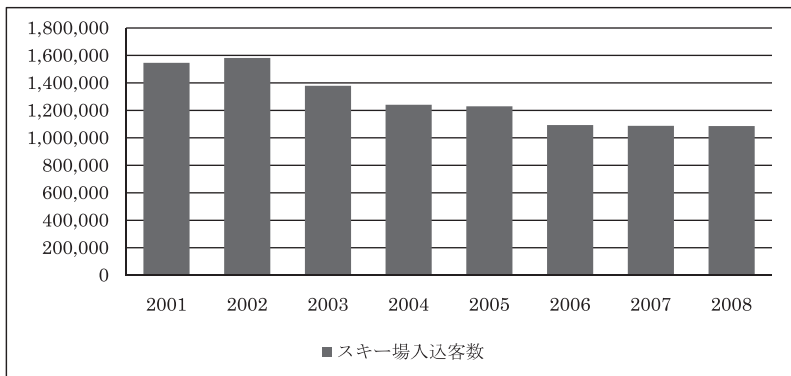
7 1947（昭和22）年に西山スキー場で国体県予選大会が開催され、同年第一回八方尾根リーゼンスラローム大会が開催された。

8 1952（昭和27）年に西山スキー場に全国5番目の木製スキーリフトが、1954（昭和29）年には名木山スキー場にも木製リフトが架設された。

9 1950（昭和25）年に神城スキー場が開発され、1956（昭和31）年には新田スキー場、嶺方スキー場、飯森スキー場、佐野坂スキー場、1958（昭和33）年には牧寄スキー場が相次いで造られた。

10 観光客数は約30万人（1960（昭和35）年）から、約89万人（1965年）、約217万人（1970年）、約243万人（1975年）と増加し、1985（昭和60）年には300万人を突破した。

図表6 白馬村のスキー場入込客数



2 調査概要

次に調査概要について説明する。調査地としたのは長野県白馬村であり、調査対象は白馬村の全宿泊業主とした。計画サンプルは678であり、有効回答票は502票であった（有効回答率74.0%）。回答票の性別内訳は男性78.5%、女性19.5%、不明2.0%であった。調査方法は訪問留置き調査法を用いた（一部郵送返送を含む）。調査日時は2009年11月30日から12月4日である。

3 調査地の諸特性

本調査からは、次のような地域の諸特性が浮かび上がってきた。

まず宿泊業における家族経営の圧倒的な多さが明らかになった。家族経営であるかどうかの設問に対し、家族経営であると回答したのは91.8%(459)（家族経営でない8.2%(41)）であった（図表7）。

図表7 家族経営かどうか

	家族経営(%)	家族経営でない(%)
家族経営かどうか	459(91.8)	41(8.2)

また、家族経営には二つの主要なタイプが存在し、ひとつは民宿・旅館（40.2%(202)）、もうひとつはペンション（36.2%(182)）である（図表8）。

図表8 宿泊施設形態

	宿泊施設形態(%)
民宿・旅館	202(40.2)
ペンション	182(36.3)
ホテル	40(8.0)
そのほか宿泊施設	56(11.2)
複数経営	22(4.4)
合計	502(100)

先述したように民宿は昭和初期に発祥し、昭和30年代の建築ブームによって民宿・旅館の数は急増した。民宿・旅館の大部分は白馬村の地元住民の家族によって経営されてきたものである。

民宿・旅館の特徴として三つを挙げるができる。まず、宿泊客を泊める民宿・旅館の建物は、経営する家族の自宅としても使用されているという点が挙げられる。民宿・旅館は経営家族の仕事場であるとともに、生活の場でもある。次に、民宿・旅館の仕事は家族構成員によって担われているという点が挙げられる。家族構成員のそれぞれに仕事が分担され、場合によっては年配者や子供も仕事を分担する。さらに、民宿・旅館は地元住民の家族によって経営されているが、それは伝統的な共同体社会である「ムラ」を構成する「イエ」が民宿・旅館の経営体の基礎的な単位となっていることを示している。民宿・旅館が密集する地区は、古くからの集落が民宿・旅館街へと変貌してきた地区である。これらの民宿や旅館は「家業」として世代から世代へと継承することが基本的には望ましいこととされている。

ペンションは、1970年代後半から急増したが、ペンションが集中的に立地する和田野・みそら野・エコーランド地区は、もともと雑木林や草地などの人家のなかったところが宅地開発、分譲され、そこへ主に都市から流入した人々によってペンションが建てられることによって新しい集落が形成されてきた地区である。

ペンションの特徴としては、次のようなことを挙げるができる。まず、宿泊客を泊めるペンションの建物は、経営する家族の自宅としても使用されているという点であり、これは民宿・旅館の場合と同様である。また、これも民宿・旅館と共通するが、ペンションの仕事は家族構成員によって担われており、家族構成員に仕事が分担されている。民宿・旅館と異なる特徴として、ペンションは主に外部社会から進出してきた家族によって経営されている点が挙げられる。

4 外部からの一時的流入者の多い地域

上述したように、白馬村の宿泊業の大多数は家族経営であり、その仕事は家族労働によって担われているが、繁忙期には家族構成員だけでは労働力が不足する。その労働力の不足部分を外部に求めてきた。このために外部から流入してくる労働者の多い地域となってきたことがこの村の大きな特徴のひとつとなっているといえる。外部から流入する労働者の大部分は、ハイシーズン（特に冬季）にだけ滞在して働く季節労働者となっている。

外部から一時的に流入してくる季節労働者は、パート・アルバイトのほかに「居候」と呼ばれる独特な雇用慣行によって雇用される非熟練の労働力として、白馬村の宿泊業を支えてきた。白馬以外からのパート・アルバイト、居候の雇用の有無について質問した結果から、最近の5年間で白馬村の宿泊業全体の三分の二弱でパート・アルバイト、居候を雇用していることがわかり、過去5年以前に雇用していたケースも数え入れると、90%以上の宿泊業でパート・アルバイト、居候を雇用している、または雇用していたことがわかる（図表9）。

図表9 白馬以外からのパート・アルバイト、居候の雇用の有無

	白馬以外からのパート・アルバイト、居候の雇用の有無(%)
いつも白馬以外からのパート・アルバイトを雇っている	136(38.9%)
過去5年で雇ったことがある	80(22.9%)
以前は雇っていたが、過去5年間は雇っていない	104(29.7%)
雇ったことはない	30(8.6%)

5 「居候」

「居候」とは、宿の仕事をするが、多くの場合、金銭としての賃金が支払われることのない雇用慣行のかたちによって雇用されている非熟練の労働者層のことである。居候は、賃金の代わりに労働の対価として以下のような雇用条件を得ているといえる。ひとつは寝泊まりする場所と食事という住込みの労働条件、つまり「食住」についての環境である。もうひとつは「遊」についての環境、例えばリフト券や自由時間として与えられる労働条件である。居候は賃金が支払われる労働者と比較して、仕事内容に関しては大きな違いはみられないが、多くの場合、労働時間が短く、日中の自由時間が与えられている。場合によってはリフト券が支給・貸与されることもある。居候は、その自由時間にスキーやスノーボードをゲレンデで楽しんだり、仲間と連立って遊んだりして自由に過ごすことが多いが、彼（女）らは、賃金よりも白馬での「遊」や「自由」を求めてやってくる流入層であると捉えることができよう。

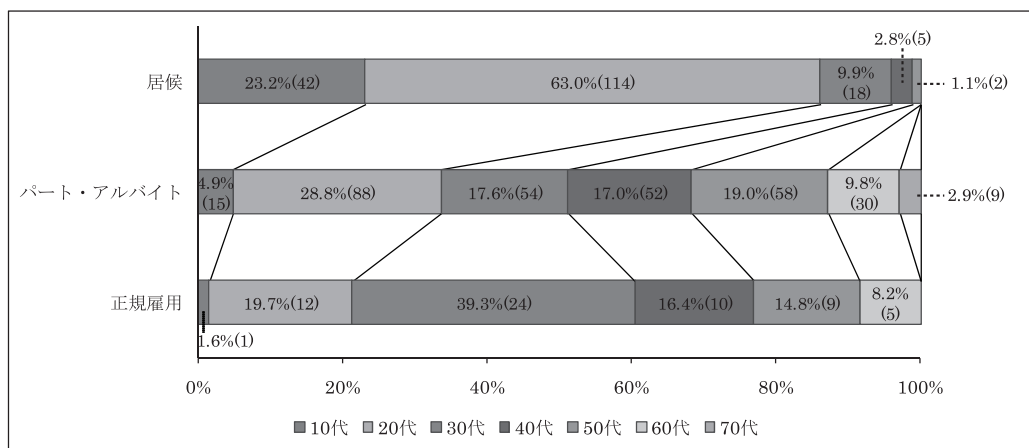
6 パート・アルバイト、居候の属性

宿泊業オーナーに対して、雇用者の主な出身地域について質問した結果からは、パート・アルバイトではその三分之一が、居候ではその約三分の二が主要大都市圏出身者であることがわかる（図表10）。

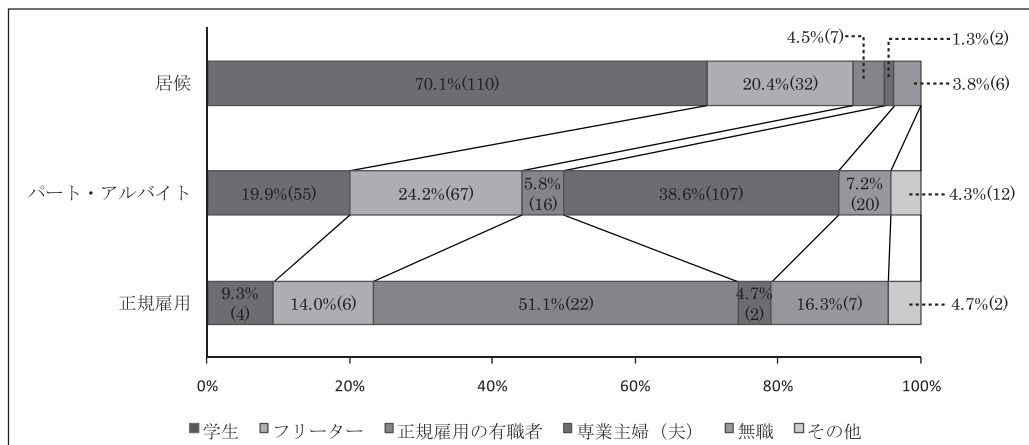
図表10 雇用者の主な出身地域

	正規雇用(%)	パート・アルバイト(%)	居候(%)
主要大都市圏	11(30%)	70(30%)	103(69%)
主要大都市圏以外	26(70%)	163(70%)	46(31%)

図表11 雇用者の年齢層



図表12 雇用者の経歴



また年齢層では若年層が多いことが分かり（図表11）、彼（女）らは多くの場合大学生やフリーターであることがわかる（図表12）。

7 他者に対する寛容性

都市部から流入してくる若年層は、白馬村内において見慣れたストレンジャーであるということはヒアリング調査でも確認されてきた。「スキーウエア着てうろうろしているからね～。ウエア、着ていない人がうろうろしていたら、なんだろう、って思うけど」という語りなどが典型的である。山があることで、スキー目的で来る若者には抵抗感がないのである。それでは、一般的な寛容性という点においてどうだろうか。宿泊業はそもそもその業務の性質上、見知らない人に対して慣れているのではないかと、いう想定ができる。一方で、白馬村は概要でも述べたとおり、もともとは農業を生業とする地域だったという経緯がある。したがって、村落共同体に特徴的な閉鎖性という面もあるのではないかと、とも考えられる。

寛容性の尺度は次のふたつを使った。ひとつめは「政治や社会のあり方について、次のような人と意見が食い違う場合、あなたはどのように思いますか。」という設問である。対象として、両親、先輩・後輩、同僚、友達や配偶者・恋人のそれぞれについて4件法でたずねている。その結果が図表13である。

図表13 意見がちがってもよいという相手

	白馬宿泊業者(%)
父親	79.2
母親	76.1
上司や先輩	75.9
部下や後輩	72.2
親しい同僚	63.3
親しい友だち	62.7
恋人・配偶者	46.7

図表14 一緒に働く機会が増えたほうがよい相手

	白馬宿泊業者(%)
異なる国籍をもつ人	28.2
障がい者	33.9
自分と違った宗教を信仰する人	19.7
年齢の異なる人	75.7
地元民ではない人	78.7
自分と異なる学歴の人	81.8
自分とは経済的豊かさがまったく違う人	52.4

この結果から、恋人や配偶者というもっとも親密な相手として想定される対象には、同じ意見をもってほしい、と考えていることがわかる。友人や同僚なども、親や上司などと比較しても、同じ意見をもつことを希望しているようだ。この結果からは、親しい人間とは意見の違いが少ないほうがよい、と宿泊業者の約半数が考えているといえる。

ふたつめは、「次にあげるような人が一緒に働く機会が増えたほうがよいと思いますか」という設問である。異なる国籍、障がい者、異なる宗教を信仰する人、年齢の異なる人、地元民ではない人、異なる学歴の人、経済的な豊かさのまったく違う人、という7対象に対して、「増えたほうがよい」から「増えないほうがよい」までの4件法で尋ねている。その結果が図表14である。

障がい者の項目に対して、いくつかのサンプルにおいて、「宿泊業という性質上、難しい」という意見がみられたが、この対象の中でもっとも受け入れがたい対象が異なる宗教を信仰する人であった。白馬村では外国人観光客が増加しており、キリスト教圏や中国はいうまでもなく、イスラム圏、ヒンドゥー圏からの観光客が流入している。商売の対象としての客に関しては、外国人観光客を誘致すべきという意見が55.0%と否定的意見を上回るが、宗教や国籍が異なる人との協働は望まないという傾向がみられた。

学歴や出身地域や年齢などの項目に対しては、75%以上が肯定的な意見をもっていた。これは白馬村特有の意識なのかどうか他の調査結果と比較しなければわからないが、ヒアリング調査では日本の観光客の特性として外国人に対する排外性という傾向を指摘する声も聞かれた。

「日本の観光客は、お客さんの割合が日本人よりも外国人が上回るといやがるんですよ。日本のホテルなのに、外国みたいなのは落ち着かない、ってね。それで、外国人観光客が日本人客の数を上回らないように制限して受けることにしたんです。」（ホテル経営者）

白馬村では一部の地区において外国人居住者が急増しており、外国人向けの宿泊施設も多い。また日本人経営の宿泊施設にも多くの外国人観光客が宿泊している。上記は、一時期、多くの外国人労働者を雇い、外国人観光客を誘致した宿泊施設のオーナーが説明してくれたものである。白馬村の共同体的特性が外国人に対する許容度が低い、というよりも日本全体の排外性との連関でこのような結果がでていとも考えられる。

このふたつの尺度を利用し、寛容度を高低に二分して分析をおこなった。つまり、社会的属性と寛容度との連関を探索した。寛容度が高い層は、低い層と比較すると平均年齢が若い。寛容度高層では56.4歳であり、寛容度低層では58.2歳であった。そして、もっとも特徴的であったのは、移動経験と寛容度が関わるということであった。

図表15

%	寛容度高割合	全体割合(N)
移動なし	35.7	23.7(106)
Uターン	53.7	19.7(87)
流入	53.3	56.6(255)
		合計:448

白馬に生まれ、白馬から離れて生活したことのない移動なし層、白馬に生まれて、いったん白馬村外に居住し、また白馬に戻ってきたUターン層、白馬以外で生まれ、移り住んできた流入層の3つに分けて分析した結果、寛容度高率がもっとも高いのはUターン層であった（図表15）。外部から流入してきた層よりもUターンという層が寛容度が高いという結果はどのように説明可能なのだろうか。そこで、次節では移動経験が属性とどのように連関しているのか確認しておきたい。

8 移動経験と属性

まず、家業として宿泊業を継承したかどうかという点は、明白に流入層とそれ以外の層で異なる。移動なしUターン層では、8割が家業継承している（図表16）。そして、年収が1000万円を超える高所得層も流入層とそれ以外の層で異なっている。その一方で、学歴という点では、移動なし

層とそれ以外の層で異なる。Uターン、流入層では、大卒の割合が4割を超えている。全体の割合からいえば、マジョリティは流入層となっており、宿泊業は地元出身者で占められているわけではないということがわかる。

雇用に関して白馬以外からパート・アルバイト・居候という非典型雇用をおこなっているのは、Uターン層である。約半数のUターン層が白馬以外からの非典型雇用労働者をいつも雇用している。この雇用の様相と寛容度とは密接に関連しているだろう。

それでは、雇用に対して宿泊業主はどのような配慮をおこなっているのだろうか。

図表16

%	家業継承割合	宿泊業開始平均年齢	専業割合	大卒以上割合	全体割合(N)
移動なし	80.2	28.4 歳	14.3	6.2	23.7(106)
Uターン	80.5	23.7 歳	28.9	43.4	19.7(87)
流入	20.0	32.2 歳	42.1	48.9	56.6(255)

	年収 1000 万円以上の割合	年収 300 万円未満の割合	従業員雇用の経験	白馬以外からのパート・アルバイト・居候をいつも雇用
移動なし	13.8	33.0	91.7	32.9
Uターン	18.1	27.8	94.9	55.7
流入	8.1	37.2	86.1	35.3

9 雇用に対する配慮

宿泊業主の移動経験によって、白馬以外から働きにくるアルバイト・居候に対する配慮はかなり異なるという結果を得た（図表17）。際立っている点は、Uターンの雇用主は、被雇用者に対して「満足いく賃金を支給する」ことに配慮しているということである。他のカテゴリと比較して、高い肯定割合を示している。さらに、学校の都合やサークルやクラブなどの都合に配慮するという項目も比較的高い肯定割合を示している。反対に、「仕事に関わらないことであっても、相手のためになることならば、厳しいことでも告げる」という項目において、もっとも低い肯定割合であった。

Uターン層がこのような傾向を示すのは、ひとつには、彼らが他のカテゴリと比較したときに高収入であることが関連する。宿泊業の経営がそれなりに順調であれば、賃金を支払うことはできる。また、Uターン層の大卒割合が高いことから、大学のある都市部で生活した経験をもつことがわかる。つまり、都市部での経済的な感覚もそれなりに身をもって知っているということが要因としてある。またコミュニケーションについては、厳しいことは言わず、プライベートな問題に立ち入っても仕方がないというような意識をもっているようである。そのかわりに、被雇用者の不満に

については耳を傾けようと意識しているようである。

経済的な対価を重視することや学校中心的な指向、思いやりコミュニケーション、とでも名指せるような雇用者の配慮は、現代日本特有の態度であるともいえよう。このような態度は都市部で際立ってみられる特徴と合致し、外部基準を白馬村における宿泊業経営に導入しているとみられる。そして、移動なし層の特徴として、被雇用者を家族同様に扱うという項目に肯定割合が高いことがあげられる。

図表17 移動経験別にみた白馬以外からくるアルバイトや居候に対する配慮

	移動なし	Uターン層	流入層
普段から話しかけるようにしている	38.1	46.8	47.9
不満を聞くようにしている	17.5	24.2	14.7
趣味や好きなことをしやすいように便宜を図る	33.3	37.1	47.9
悩みなどの相談に乗る	14.3	16.1	16.6
プライベートな問題には立ち入らない	36.5	24.2	35.0
家族と同様に接する	65.1	53.2	54.0
学校の授業や試験などの都合に配慮する	49.2	58.1	31.3
サークルやクラブの都合に配慮する	49.2	56.5	28.2
仕事の内容を丁寧に教える	42.9	37.1	46.0
自由時間を与える	50.8	54.8	58.9
満足のいく賃金を支給する	6.3	11.3	5.5
礼儀について丁寧に教える	12.7	22.6	23.9
不本意な休暇の申し出についても考慮している	11.1	14.5	15.3
仕事に関わらないことであっても、相手のためになるならば、厳しいことでも告げる	23.8	19.4	30.1

10 外部基準の導入

上述のように、白馬以外から流入してくる労働力の受け入れに関する分析からは、Uターン層の際立った外部基準の導入という結論が得られた。白馬村以外から流入してくる労働力は、大都市圏からの比較的若年層が多く、学生である割合も高い。白馬以外からの労働力をあてにしているUターン層の宿泊業主が学生文化に配慮していることがこの結果から読み取れる。一方で、移動なし

層の特徴は、「家族同様に接する」という項目の肯定率がもっとも高い。つまり、働いてもらうアルバイトや居候に対して、白馬村や宿泊業主の家の文化に慣れてもらおうという態度がみられる。

流入層の特徴としては、「仕事に関わらないことであっても、相手のためになるならば、厳しいことでも告げる」と「趣味や好きなことをしやすいように便宜を図る」という項目の肯定率が高かった。つまり、流入層の宿泊業主は、彼らも白馬村に魅力を感じて移動してきた層であることを物語っている。彼らの特徴として、山や自然に対する愛着から宿泊業をはじめ、という経緯をもっていることがあげられる。したがって、若年層の趣味活動についても、好意的であり、また実際にはその同じ趣味をもつ仲間としての人間関係形成という側面が窺える。山や自然とつきあう場合には、技術の習得や互助的関係が必要な場面が多くみられる。したがって、ビジネスライクな人間関係ではなく、全人格的なつきあいとしての関係性を指向しているということもいえるのかもしれない。

11 まとめ

本稿では、農村地域であった白馬村流入層の地域的受容について、宿泊業主の全数調査から結果を紹介してきた。白馬以外から流入してくる一時滞在の労働者は、その目的が趣味を中心とした生活を送るためであるケースが多い。そのような状況のなかで「居候」という独特の生活形態もあり、ウィンタースポーツを楽しみたいが金銭的に余裕はない若年層、学生といった層に都合のよい文化を形成している。宿泊業主にとっても、多忙なときに手伝いをしてくれる労働力としてあてにすることができる都合のよい労働文化となっている。また、アルバイトについても、宿泊や食事を提供することで、宿泊客が多くいる休日や忙しい時間帯には業務をおこなってもらい、時間的に余裕のある平日や昼間の時間帯には、自由時間をとってもらって存分に趣味を楽しんでもらう、という形態が可能となっている。

この場合、都市部から流入してくる他人と生活を共にするという受け入れ方を宿泊業主は選択しなければならず、その関係も仕事のみならず生活全般にわたってくる。労働という部分的な関係では避けられるリスクもこのような生活全般に関わる場合、避けられないことも多い。それでも、宿泊業主が一時滞在の労働力を受容することによって、雇用に関わるメリットと地域における多様性の確保というメリットを得ている。

宿泊業主の半数が流入層だということは、白馬村の多様性を確保することにつながっている。また、Uターン層の宿泊業主が比率としてもっとも少ないとはいえ、多くの流入労働力を雇用していることも大きな意味をもっている。彼らは外部の基準を村内に持ち込み、一時滞在の流入労働力層と村社会との媒介役として機能している。これらの要因が重なることによって、白馬村では村落共同体としては珍しく、多様な村民を確保した社会を形成している。その一例として、近年ではオーストラリア人が区長を務めているという区もある¹¹。

ウィンタースポーツをするために青年期に白馬村に滞在し、居候やアルバイトを経験したという

¹¹ 白馬村では、町内会ではなく、区を単位として行政がおこなわれている。

流入層の宿泊業主も少なくない。その経験が、白馬村で宿泊業を営むきっかけとなったという例もみられる。

若年者の非典型雇用について多く問題を抱えている現代において、白馬村という事例は多くの示唆に富むものである。金銭を稼ぐことのみが労働者の目的ではないということや、雇用する側のホスト社会が一定のリスクを背負いつつ、一時滞在層との関係を形成していくことによって、流入層を確保し、村落に多様な人材を保持することを可能にしていることがわかる。

また、制度的な観点からみれば、「居候」や「中抜き」という形態は、批判の対象として語られることが多いが、白馬村の事例では目的合理的な働き方である場合もあるということがわかる。そして、共同生活することから、村落での生活形態を一時滞在者に示すことによって、都市生活者に村落生活への希望をもたせることになり、流入層を確保しているのかもしれない。

この事例は宿泊業であるため、生活の場そのものが労働の場となるような特殊な事例だともいえる。職住分離が進んだ都市生活者の非典型雇用において、この事例が援用できる範囲は狭くならざるを得ない。しかし、雇用側が被雇用者とどのような関係を構築するのかというときに、その社会全体で被雇用者をその生活とともに面倒をみるというやり方は、社会に多様性をもたらすということはいえそうである。若年非典型雇用の問題だけでなく、外国人移民労働者の問題を考えるうえでも、彼らの生活とともに労働を雇用者の側が配慮することが必要であり、それは社会に多様性の確保を帰結させ得る。

参考文献

- 外国人旅行者の受入環境の整備に関する研究会、2009『外国人旅行者の受入環境の整備に関する報告書』長野県公式ホームページ (<http://www.pref.nagano.jp/kanko/kankoshin/inbound/ukeire/hokoku.pdf>)
- 白馬村『白馬の歩み(白馬村誌)——第四巻 観光・登山・スキー編——』、[1994]
- Hevenstone, D, National Context and Atypical Employment, *International Sociology* 25, Number 3, [2010]
- 石井英也「白馬村における民俗地域の形成」『人文地理』29(1)、[1977]
- 岩田考「現代若者における市民性(4) —非正規雇用と政治・社会参加—」第81回日本社会学会一般研究報告資料、[2008]
- Keller, B. and Seinfert, H, Atypical Employment and Flexicurity, *Management Revue* 16, [2005]
- Kalleberg, A.L. Nonstandard and Employment Relations: Part Time, Temporary, and Contract Work, *Annual Review of Sociology* 23, [2000]
- 加瀬和俊『集団就職の時代』青木書店、[1997]
- 荻谷剛彦・菅山真次・石田浩編、『学校・職安と労働市場—戦後新規学卒市場の制度化過程』東京大学出版会、[2000]
- 岡本祐二「若者労働の現在—「正社員」=「自立」モデルを超えて」羽渕一代編『どこか【問題化】される若者たち』恒星社厚生閣、[2008]

付記

本稿は、平成20年度～22年度文部科学省科学研究費補助金(若手B)「現代の地域社会における一時的定住民の実態調査と社会的機能分析」(井戸聡代表)、平成20年度日本経済研究奨励金「観光村を支える若年労働者のライフスタイル」(羽渕一代代表)、平成21年度弘前大学若手支援事業費「若年移動労働層の円滑な受け入れの社会関係要因の解明」(羽渕一代代表)の研究成果である。本調査研究にご協力頂いた白馬村の役場、白馬商工会、財団法人白馬村振興公社、白馬村観光局、宿泊業主のみなさまに感謝申し上げます。